

〈特定質問〉

樋笠勝士

「神の摂理をめぐる問題：ストア派と教父との間の
連続と不連続——アウグスティヌスを中心に」
に対するコメント¹⁾

出村 和彦

ストア派と教父との間の連続と不連続について論じた樋笠氏の広範な特別報告から多くを学ばせていただき感謝である。本報告は、概してストア派と教父とりわけアウグスティヌスとの「同一歩調」を強調していたと思われる。そこで私は、教父に代わって少し挑発的に、そもそも大前提からして「不連続」なのではないか、という立場から質問した。ただし当日の特定質問は時間の制約のゆえ、以下の三点についてのごく簡潔なものであった。

まず、神の意志の問題について、【Q1】ストア派の神に意志があると教父は認めただろうか、と質問した。次に哲学的流れについて、【Q2】プラトン『ティマイオス』からアレクサンドリアのフィロンを経てオリゲネスに至るプラトニズムの媒介なしには、ストアの自然観は教父には受け入れがたかったのではないかと、つまり、連続があるとして、それはプラトニズムとの連続ということになるのではないかと問うた。さらに、樋笠氏の取り上げた「正しい意志に即した感情」が、翌日のシンポジウムのギリシア教父のアパテイア論やアンセルムスの *rectitudo* 論につながる展覧を提供していることに注意を喚起した上で、最後に【Q3】ストア派の倫理学を推し進めたかに見えるペラギウスのようなキリスト教修道士もいたわけで、そこでの人間理解をどのように位置づけたらよいのか、について質問した。

1) 大会発表時の題名を用いたため、本誌収録の特別報告の題名とは異なる。

以下、樋笠氏の論点を追いながら主として私の第一の質問点を敷衍することにして。なお、本誌収録の特別報告論文ではなく、学会での発表原稿に基づいて引用し、これへのコメントになるので、すでに論文によって補強ないし修正されているいくつかの論点があるかも知れないことをあらかじめお断りしておく。

樋笠氏の発表は、第一節で作品としての宇宙論とも言うべき観点から、ストア派においては、この宇宙に見られる「対照の美」および「全体の美」からこの作品の完成度から遡及的に求められる「画家制作者の能力 *ars*」すなわち「念入りに作品を仕上げ制作しようとする作者の技術的な能力や作者による作品への特別な配慮という意志的な視点が暗示されている」と指摘している。ここにはストア派の「神の摂理」を「決して単純な意味での「計画」や「予知」のような知的なものに留まるのではない」という重要な方向付けが為されている。

アウグスティヌスがそのような意志的な創造主を認め、その作品としての宇宙の美を擁護していることはその通りだとして、これがストア派との「連続」の例となるのであろうか。樋笠氏は第二節で、①宇宙の美②部分の位置づけ③作品創造における作者の力と配慮という観点がストア派とアウグスティヌスら教父に共有されていることを論じる。その重要な典拠は、「美しいものは何も無為に偶然に生じているのではなく何らかの技芸によって生じている」というポセイドニオスの言葉である。ここからストア派が「自然が技芸的な創造者たる神として仰ぎ見られる最善の存在であり、知恵と知性を有していると考えられる」という。すなわち、自然は「手順に従って生成に向かって進む技芸的な火」であるというストア派の定義に拠って、自然そのものが「技芸的な創造力をもつ者 *artifex*」であり「技術者 *τεχνιτης*」と呼ばれていることが典拠として挙げられる。

しかし、この所産としての美しい宇宙を作り上げる能産としてのストア派の自然は、アウグスティヌスら教父の認める創造主 *creator* と連続するであろうか。

ストア派の自然学の公式見解「何ものも原因なしには生じ得ない (*nihil fieri sine causa*)」が挙げられているように、宇宙生成がそれに従うところの技芸 *ars* は、クリュシッポスも言うところの「すべてのものは最善の自然に従って作られている」というような必然的なロゴスに他ならず、それは所産たる作品に内在している見事な筋道であるにしても、これを作り出した作者の意図とか力量を作品とは独立に立てることは（比喩的表現は別

として) 論理的には出てこないのではないか。作者は本来、作ることも作らないこともできるという自由があるはずである。この点がストア派の「技芸的な創造力をもつ者」の想定から伺えない限り、かえって教父との非連続を際立たせているのではないか——これが報告の前半に対する質問であった。むろんここには、プラトンの『ティマイオス』の創造神(デミウルゴス)という観念を教父たち(とりわけ『ヘクサエメロン』を書いたバシレイオスやアンブロシウス)やストア派がどう受容していたかという問題が付随する。その際には古代末期において教父たちが問題としたストア派とはそもそも何(あるいは誰)であったか、という問いに直面することになる。このことはシンポジウムの主題に他ならず、本報告は今後の議論を喚起するものとして有益であった。

樋笠氏の報告は、当日取り上げて議論できなかったが、実は後半極めて興味深い論点を提出している。第4節でアウグスティヌスにおける「神の摂理」を初期の『秩序論』と中期の『神の国』を比較考察しながら、ストア派の「運命」との対立軸を明確にしているのである。氏によれば、アウグスティヌスの立ち位置の形成には、キケロのストア派批判が介在しているという。すなわち、神の予知の必然性を承認による運命の決定論者たるストア派に対して、キケロはこれを批判して、神の予知ないし運命を否定する自由意志論者の立場に立つとアウグスティヌスが見なしていたというのである。そして、アウグスティヌス自身はこの両者を批判する立場として、すなわち、クリュシッポスの両立説の影響を受けて、この「別のストア派」との親和的な「アウグスティヌス独自の両立説」の立場を打ち立てたとするのである。運命論(ストア一般)・自由意志論(キケロ)そしてクリュシッポスの両立論を経てアウグスティヌスの両立論という説明は独創的で、ここにこそストア派とアウグスティヌスの連続性が見られることの大きな典拠ともいえる事柄である。つまり、もしそうだとすると、アウグスティヌスは、運命論的なストア派とは非連続であるが、両立論的なストア派とは連続的であると言いうるからである。アウグスティヌスの意図は「必然性を受けない領域」すなわち、「必然性の議論を越える議論の領域をつくることだった」とされるからである。とは言え、その「必然性を受けない領域」は、アウグスティヌスの場合、「ストア派とは異なって、合理化とは別次元の信の営為を発動させるものとなる」と位置づけられる。両立論は概して人間の側から自由と必然の調停を立論するものであるが、樋笠氏は、『神の国』5, 10を引用しながら、アウグスティヌスにおいては、

「ちょうど神の意志が必然性に支配されず、意志によって全能とされるように、「それと同じように」人間も「自由を奪うような必然性に意志を従属させることはない」のである」。つまり、「我々は自由に生きるために…神の予知を否定することは決してしてはならない」とするのである。

人間に「必然性を受けない領域」をつくるという営為自体が価値を保つような主張であり、生き方の問題を示している」という指摘は鮮やかである。しかし、アウグスティヌスにおいて、必然性を越える神の意志の自由が優先しているのであり、人間はこれと「同じように」自由であるという。この順番のもつ意義は決して小さいものではない。樋笠氏も結論的に引用するように、アウグスティヌスは「神の摂理は、我々に、事物を愚かにも咎めることなく、事物の効用を熱心に問い尋ねることを、そして、我々の素質や弱さがそれを見いだすことができない場合は、我々がかろうじて見いだしたある種の事物がそうだったように、隠れた効用を信じるよう促すのである。なぜなら隠れた効用を見いだそうとすることは、或いは我々の謙遜を練習することとなり、或いは傲慢を砕くことになるからである」（『神の国』11, 23）。ここに至るとやはりストア派の賢者の理想との隔たりは際だっていると言うべきではなかろうか。残された問題として、『秩序論』の段階でのアウグスティヌスの摂理や神の予知の把握と『神の国』での把握の間を丹念に跡づけて、アウグスティヌスの考えに発展変化を認めるか、それともある種の一貫性を認めるかという議論であろう。これは「信」や「理性」および「知恵」の捉え方の問題とも連動する問題である。

これに関わり、樋笠氏の報告は第5節で、「神の摂理」と感情の考察に進んでいる。すなわち、賢者における感情の問題を問うているのである。ここに至って、氏の論調はストア派とアウグスティヌスの連続よりは不連続を明らかにするようになる。アウグスティヌスが認める「心からの喜び *gaudere*」のような「よき感情」の生起の分析を通じて、ストアの賢者の感情のあり方を批判し、他方、「人間の弱さといったこの世の否定的要素のうちに（ストア派から見れば）含まれてしまうような感情もまた、「神の摂理」の言説の中に取り込まれる仕方、その正しい生起が称揚される」点でストア派と受肉した神のもつ「人間的な感情の状態」をも神の権能に基づき、そこにおける人間性そのものをストア派の「不動心 *apatheia*」を超えるほどに価値を持つとした氏の結論は美しい。しかるに、キリスト教の中にも、たとえばペラギウスのようにやはり賢者的な完成を求め

る志向は根強くあったわけで、さらに、一般的に言えば、修道制における修徳 (askêsis) におけるアパテイアとストア派のアパテイアとの関係は、一見すると連続性とも見られるが、この関係を改めて問い直すことが課題として残されていることを指摘して擱筆することにした。